

石川栄作著『ブリュンヒルデー伝説の系譜一』

大野, 寿子
東洋大学

<https://doi.org/10.15017/7405142>

出版情報：九州ドイツ文学. 39, pp.73-79, 2025-12-26. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



石川栄作著『ブリュンヒルデ——伝説の系譜——』

大 野 寿 子

それ〔ニーベルンゲンの歌〕は決して特定の形式を持たず、いつも流動的で適合しつつ、謡う口それぞれに異なっていなければならなかった。¹⁾

ヴィルヘルム・グリム

ブリュンヒルデ〔ブリュンヒルト〕は「冷血」で「嫉妬深い」、「女豪傑」なのか。それとも「自己犠牲」により「愛」を貫く孤独な *femme fatale* なのか。名もなき民が語り継いだ民話や民謡のごとき素朴な民間文学（*Volkspoesie*）の要素も有しつつ、宮廷歌人の記憶・着想・技術に彩られながら風格漂う叙事詩に生長し、ゆうに1500年の時を経て今日に至る「ニーベルンゲン伝説」は、グリム兄弟がそう評価するように、ドイツの国民文学（*Nationalpoesie*）と言っても過言ではない。英雄ジークフリートの超人性やその妻クリームヒルトの愛と復讐が注目される傾向にはあるものの、二人の関係性の影に隠れがちな「ブリュンヒルデ」こそ、創作文学（*Kunstpoesie*）へのモチーフ受容をも含む「伝承」の連続性の中で、「災い」の象徴から「救い」の象徴へと変容を遂げる着目すべき存在である。このような仮説を証明すべく、アンドレアス・ホイスラー（1865-1940年）の「発展段階説」（1921年）に依拠しつつ、ニーベルンゲン伝説の生成過程を丹念に検証し、近現代文芸への受容の在り方の再検証と再定義を試みているのが、石川栄作著『ブリュンヒルデ——伝説の系譜——』（全245頁）なのである。彼女は、異教の神々の面影を宿す存在か、それとも人間の女なのか。伝承と受容を実現させてきた詩人たちのこの解釈の差が、「ブリュンヒルデの変容」を解く鍵となる。以下、著者の叙述を紹介しつつ、伝承文学研究およびグリム研究の立場からも一言二言呟かせて頂きたい。なお、各伝承媒体において人名等の固有名詞にゆらぎが生じているが、研究上は同一人物と見なすこととする。

* * *

繊細さと大胆さが絶妙に調和した筆致で小気味よく進む全七章の中で、北歐への伝承過程を解説した前半三章が、全体の要となる。第一章「古代ゲルマン時代の原型」では、『ニーベルンゲンの歌』に二つの源流が存在し、「ブリュンヒルト伝説」（5-6世紀）は三段階、「ブルグント伝説」（5世紀）は四段階の変容過程を経て当該叙事詩に至るという「発展段階説」が、丁寧に紹介される。ここに、「最初は口承によって語り継がれた」ため「常に流動的」であり、本来は「もっと複雑な過程を経たもの」であったという示唆が加わることで、研究者としての用心深き客観性をも備えつつ、テキストの背景にロマンの面影を追いつめる、いわば読者の探求心をも刺激得る語り口となっている点が心憎い。

「ブリュンヒルト伝説」第一段階の土壌は、5、6世紀のライン河畔フランケン領土であ

り、遠い北方の島に君臨するブリュンヒルトの城の周りには不思議な炎の壁がある。グンターに扮したジークフリートがその壁を乗り越えて（炎越え、姿交換）、男女の間に抜き身の剣を置いた初夜が明けると、彼はブリュンヒルトから指輪を抜き取る。その指輪がジークフリートの妻クリームヒルトの手に渡り、女性同士の夫自慢が諍いの火種となっていく流れが、当該描写の背景に存在する歴史的事象に依拠しつつ説明される。「ゲルマン民族大移動時代の厳しい生活条件の中から生まれた」というこの段階のブリュンヒルトは、「魂の葛藤」に苛まれる悲劇の主人公として、「大衆的な性質」を帯びていたと石川氏は語る。次に**第二段階**では、ドイツ中世文学最初の興隆期（12-13世紀）に、ベルゲンのハンザ商人の間で歌われ『新ブリュンヒルト歌謡』となる。古ノルド語で書き留められた散文『ティードレクス・サガ』（1250年頃）では、ブリュンヒルト求婚時の「炎越え」や「姿交換」が、「競技への勝利」へと変化しており、「超現実的」な話が当時の人になじまなかったという可能性が指摘されている（彼女の「超女性的力」〔怪力〕が処女喪失と共になくなる仕組み）。

一方「**ブルグント伝説** **第一段階**も、ライン河畔で5世紀頃成立している。ジークフリートの死後、彼の財宝を手に入れたグンターとハーゲンがエッツェル王に招待され、その財宝故に命を奪われる。エッツェルと再婚したグリームヒル〔クリームヒルト〕も復讐心から、自身の子供たちの心臓を夫に食べさせるという暴挙にでる（父親に子供の肉体を食べさせるモチーフはKHM47「ネズの木」の継母を想起し得る）。当該描写の根拠たる諸々の史実を冷静に解説しつつも石川氏は、歴史上での十数年が、英雄歌謡では一日に圧縮されている興味深い事実を見逃さない。この圧縮のごとき誇張のプロセスは、アルバート・ロードが提唱するオーラル・コンポジションの「話の可変部分における伸縮自在性」に妥当する、重要な指摘ではなかろうか〔丸山顕徳『古代文学と琉球説話』参照〕。次に、8世紀頃バイエルン・オーストリア地方に渡ったとされる**第二段階**の四つの改変箇所の中で特筆すべきは、復讐成就後のクリームヒルトが（自死ではなく）ディートリヒ・フォン・ベルンによって成敗される場面、すなわち「ディートリヒ伝説」の混入である。ディートリヒがエッツェル王宮に滞在した事実を知った詩人が、「無関係のままにはしておけなかった」という石川氏の見解にも、聞き手に直接関心のある人物を登場させるオーラル・コンポジション（の一つ）が見え隠れするようだ。さらに**第三段階**として、バイエルン・ブルグント伝説が1160年にドーナウ地方にて、（口頭）歌謡から叙事詩『古きニーベルンゲン災厄』（読み物）となった過程が、『ティードレクス・サガ』、フェロー諸島の三つの舞踏譚詩やデンマーク歌謡『クレモルトの復讐』等から推定可能とみなされる（キューレンベルクの抒情詩用詩形の叙事詩への転用）。さらに、ベッヒラーデンのリュディガーの元での滞在描写の加筆をも、石川氏は見逃さない。これら二つの伝説は、それぞれの第二段階で内面的な結びつきを呈し、「たがいに接して生長した」という。もし順番に朗読されれば、「ジークフリートの死は二つ目の伝説の転回点」となり、「ブルグント族滅亡はその英雄の死の報復」ともなり得るが、まだ融合には至っていなかったのだ。

第二章「北欧への第一次伝承」では、9世紀以降ヴァイキング等が北欧に伝えた「ブリュ

ンヒルト伝説』第二段階の周辺が、音韻研究等の根拠をもってクローズアップされる。『歌謡エッダ』の書写(1270年頃)しかり、散文『ヴォルスunga・サガ』(1260年頃)しかり。さらにスノリが1222-25年頃に執筆した『散文エッダ』は、ニーベルンゲン伝説を伝える英雄歌謡が、当時、彼の周辺に存在していたことを推測させる。まず、『歌謡エッダ』全37篇(含断片)第二部「英雄伝説」所収のニーベルンゲン伝説歌謡(19篇中)4篇に、ブリュンヒルトに関する記述がある。①「シグルドリーヴァの歌」(900年頃、ノルウェー)には、シグルズ〔ジークフリート〕がフィンダルフィアルの山で目覚めさせた女性ワルキューレのシグルドリーヴァが、「勝利(シグル)を駆り立てる(ドリヴァー)女性」として自らの眠りの理由を語り、彼にルーネ文字の知識と忠告を与える場面がある。つづく②「シグルズの歌」(9世紀初頭、ノルウェー)ではシグルズが暗殺され、③「シグルズの短い歌」(11世紀末/13世紀初頭、アイスランド)でブリュンヒルトが殉死する。④「ブリュンヒルトの冥府への旅」(11世紀末/12世紀初頭、アイスランド)では、彼女が冥府の女巨人に己の生涯と運命を語るにより、シグルドリーヴァがブリュンヒルトと判明するのである。ブリュンヒルト(甲冑〔ブリュン〕を身に着け戦う〔ヒルデ〕女性)は、覚醒後、あるいはシグルズとの愛を育んだ後の名前だったとすれば、後のワーグナー楽劇への予兆ともなり得よう。

一方『ヴォルスunga・サガ』では、シグルズがオージン〔オーディン〕の子孫である経緯が語られる。オージンの息子シギ(勝利の意)の息子レリルの息子ヴォルスングは成人後、フリョールズ(ワルキューレ)と結婚し、十男一女をもうける。その中の長男ジグムントが(双子の妹シグニユーとの近親相姦ではなく)、三番目の妻ヒョルディースとの間にシグルズをもうける(KHM9「12人兄弟」が妹の誕生と共に疎まれる理由は近親相姦回避だったのだろうか)。フィンダルフィアル山で炎に囲まれ眠る男装の戦乙女ブリュンヒルト(ズリ王の娘)を、竜の血が舌に触れたために小鳥の言葉を解すようになった英雄シグルズが訪ねる(ヘビ〔竜〕を食べて鳥の言葉を解するようになるKHM17「白ヘビ」と酷似)。オージンの意に反した罰として、「眠りのイバラ」で刺されたという身の上を語る彼女と婚約し、彼は館を去る(ヤコブ・グリムは『ドイツ神話(学)』でKHM50「いばら姫」の鍾と「眠りのイバラ」、イバラの生垣と「炎の壁」との類縁性を指摘する)。ここではブリュンヒルトは、未来を占う超人的存在であり、シグルズへの「愛」ゆえの嫉妬と復讐の結果、あの世で結ばれるのである。さらに、スノリの『散文エッダ』第41章「黄金がニーベルンゲンの財宝あるいはその遺産と呼ばれる理由」では、ブリュンヒルトが、フン族アッティラ王の北欧表示たるアトリの妹とみなされる点が特徴的である。

第三章「北欧への第二次伝承」では、ニーベルンゲン伝説が東ゴート・ティートレクス大王説話に織り込まれ、ノルウェーにおいて、『ティードレクス・サガ』(1250年頃)に編纂される過程が示される。タルルンゲン国ジグムント王の妻ジベベ(ヒスパニアのニードゥング王の娘)は、夫の留守中に森の中で出産し命を落とす。生まれたジグルド〔ジークフリート〕は旅の果てに、馬の飼育場を所有するブリュンヒルトから雄馬グラーネを手に入れ、グンナル王の城に到着する。ブリュンヒルトとジグルドの再会時には、以前婚約して

いた体裁で話が進むが、その婚約の描写が実は存在しないという矛盾の指摘が小気味よい。北欧第一伝承のブリュンヒルト重視に対し、北欧第二伝承では、グリームヒルト〔クリームヒルト〕重視というアスペクトの変化が指摘される。

第四章「ドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』」ではホイスラーに依拠しつつ、この叙事詩を成立させた詩人の業績が六点に集約される。ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説を①「一つの」作品に結び付け、②大きい方（後編）の原型の詩形で全体を統一し、③内容的均衡を持たせ、④風俗描写や精神生活等を宮廷的な趣味に合わせて洗練させ、⑤言語や詩句を時代の要求に合わせ、さらに、⑥物語を拡大し豊富にして両部の分量的均衡を図ったというのである。パッサウからウィーンまでの地理的描写の精密化から、当該詩人がドーナウ地方出身であり、また、『エーレク』（1180-85年）、『イーヴァイン』（1200年）を想起させる引用部等より、1200-1205年の成立と「ある程度正確に」推定できるという主張には説得力がある。当該写本は、18世紀以降発見されて現在に至る（断片を含め30数種）。

さて、ブリュンヒルトは北方の国アイスランドの女王たる女豪傑（人間）として登場し、彼女に求婚するグンターの家来たるジークフリートが、「隠れ蓑」で「姿交換」をして「三種競技」に挑む。結婚の条件が、「炎越え」を成す勇者（原型時）から「石投げ・幅跳び・やり投げ」競技の勝者へと、その後の妃同士の口論も、「河の中」（原型時）から騎士たちの「競技観戦」（そして「大聖堂前」）へと、すなわち、13世紀初頭の騎士社会の嗜好性へと変化する点が指摘される。夫を心から愛するクリームヒルト vs. 「王妃」たる地位を重視するブリュンヒルトのみならず、「高きミンネ」の精神あふれるジークフリート vs. 「女王」との婚姻を他力本願で成す「肉欲的」なグンターという対比も興味深い。さらに、「国王の妃で側女」という、クリームヒルトのブリュンヒルトへの手厳しい指摘から、証拠の「指環」と「帯」を提示してブリュンヒルトを追い詰めていく両王妃の口論の過程が、白眉とみなされる。ブリュンヒルトの恥辱がエスカレートする様を見事なタッチで展開させているという石川氏の見解は、いささかクリームヒルトびいきにも映じたが、これが前触れだったと気づくのは第六章だ。いずれにせよ、二人の王妃の「復讐」の原動力が、「悲しみ」にあるという解釈は揺るがない。以降、16世紀の韻文版『不死身のザイフリート』、ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』（1557年）、さらに17、18世紀の民衆本『不死身のジークフリート』を経て、主人公は「竜退治」のジークフリート、クリームヒルトは「竜に誘拐された乙女」に定着してゆく。こうして（ヤマタノオロチ伝説のような）ジークフリート冒険譚からは、古代ゲルマン的な悲劇性が（ブリュンヒルトと共に）影を潜め、30年戦争による文化衰退期へと突入するのである。

第五章「近代におけるニーベルンゲン伝承作品」は、『ニーベルンゲンの歌』の写本が相次いで発見され（いずれもスイス）、ボードマーや弟子のクリストフ・ハインリヒ・ミュラーにより、1757年と1782年に刊行された件ではじまる。しかしながら時代を先取りしすぎたか、外国文化追従時代のただ中、後者がフリードリヒ大王に献上されるも、「過去の塵の中から掘り出される価値もない」（1784年）と酷評されたのだ（実に口惜しい）。以後、

ヘルダーを皮切りに、ティークが『シュヴァーベン時代のミンネ歌謡』（1803年）の序論で『ニーベルンゲンの歌』にふれ、グリム兄弟もニーベルンゲン研究を手がけ、特に兄ヤーコプの『ドイツ神話（学）』（1835年）が後々ワグナーに影響を与えてゆく。このような伝説受容の根底には、神聖ローマ帝国解体により高まったドイツ民俗思想および愛国心が存在しており、それらが古ドイツ文学受容を指向していく時代が到来する。フケーの戯曲小説『北欧の英雄』三部作（1808-1810年）の第一部『大蛇殺しのジークフリート』では、炎に囲まれ、鎧を身に着け眠るブリュンヒルドゥル（アトリの妹）の周りには三人のノルンが存在し、彼女の過去、現在、未来の出来事を物語るようになる。ここに、『散文エッダ』研究の成果と共に、神話的指向性の復活もが見てとれる一方で、ラウバッハの戯曲『ニーベルンゲンの財宝』（1828年）はむしろ、脱神話化された『ニーベルンゲンの歌』の影響下にある。さらに、ヘッベルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作（1860年）では、ジークフリートがバルムンクの剣を頭上で三度振り回すと、眼前の炎の海が消え、城壁の上に気高い乙女ブリュンヒルトが現れる。イーゼルラントの王女が姫を出産後に死亡するのだが、乳母フリッガに託されたこの姫こそがブリュンヒルトであり、キリスト教の洗礼を受け付けなかったというのである。「帯」が引き金となる女性同士の口論の際、ブルンヒルトの憎しみは「魔力」による「恋」に根差し、その魔力を解き得るのは「死」のみとされる。神話的時代、異教的時代、キリスト教的時代という三つの時代が衝突し、破滅の中から新しい時代が生まれるという解釈は、実に興味深い。

第六章「ワグナーの楽劇『ニーベルンゲンの指環』四部作」では、序夜『ラインの黄金』（1854年）、第一夜『ワルキューレ』（1856年）、第二夜『ジークフリート』（1871年）、第三夜『神々の黄昏』（1874年）のエッダ・サガ受容が浮き彫りとなる。序夜では、神々の長ヴォータン〔オーディン〕が地の底のニーベルンゲン国へと出かけ、侏儒アルベリヒから、（所有者に「死」の呪いが振るにかかるという）指環と黄金とを奪う。知恵の女神エルダの助言により、指環は巨人族へと渡りはするが、遠大な指環奪還構想として、ヴォーダンが人間族ヴェルズングを創る。このように、「権力」（所有権、覇権）がテーマの序夜に対し、「愛」がテーマとなる第一夜では、ヴォーダンとエルダの間にブリュンヒルデが誕生し、ワルキューレへと成長する。ヴェルズングの息子ジークムントとフンディングの決闘で、ヴォーダンの正妻フリッガが後者の勝利を主張する一方、愛娘ブリュンヒルデが前者を勝たせようとするのは、父の気持ちを慮る娘の「愛」ゆえであり、さらに、この件で永遠の眠りにつく愛娘の願いを聞き入れ、火の神ローグに炎の囲いを作らせるのも、父の娘への「愛」ゆえであると石川氏は説く。彼女が「真に勇敢な英雄にのみ身を委ねる」と語る場面の「ジークフリートのライトモチーフ」も、ブリュンヒルデとジークフリートが「愛」で結ばれる仄めかしと解される。北欧第一伝承からの継承性とワグナーの独創性とが、圧巻の筆致で語られてゆくのが本章の特徴である。

ブリュンヒルデから「勝利を喜ぶ英雄ジークフリート」と名付けられた（お腹の）子を、第二夜では、ジークリンデが「東方の森」で出産した後命を落とす（双子の兄ジークムントが父親）。赤子が成長し竜退治に出かける際の「恐れ」を知るためという目標設定が、

KHM4「恐れを知るために旅に出かけた男の話」に依拠している事実も、また、「炎を通り抜け」「花嫁を目覚めさせる」のは「恐れを知らぬ者だけ」とジークフリートを導く小鳥に、ジークリンデの母性愛を見てとる解釈も、双方非常に興味深い。ジークフリートにとってブリュンヒルデは（家系上の）伯母にして妻であり、かつ、母親のようにも映じているのだ。名付け親たる彼女の方も、ジークフリートに対して「母性的な愛」を抱き、彼の愛を受け入れ、神々の世界と決別し、人間の女性として生きる決意を固める。5、6世紀以降「はじめて、ジークフリートとブリュンヒルデの愛が高らかに歌い上げられた」と、ワーグナーの功績を讃えるこの箇所こそ、本著作の最高潮と言っても過言ではない。ならば第四章で論者によぎった石川氏のクリームヒルトびいきこそが、このブリュンヒルデ賛美へと向かうための布石とも言えはしまいか。そしてここまできると、クリームヒルトを語る時には夫ジークフリートのごとき眼差しで成り行きを見つめ、一方、ブリュンヒルデ（ブリュンヒルト）を語る時には、己を慮った娘を愛しつつも正妻との約束を守る父ヴォーダンのごとき眼差しで、彼女を見守る石川氏の視座の変化あるいは複合性に、気付く読者もいるのではなかろうか。

続く第三夜ではまず『ヴォルスンガ・サガ』を敷衍し、ジークフリートが「愛」の印として、ブリュンヒルデに「指環」を贈って去る場面が感動的に描かれる。その後、この「指環」が災いの元とはなるが、ブリュンヒルデが「ジークフリートの本当の妻は私」と高らかに語る箇所が、あの第四章の「側女」呼びわりの「裏返し」と解釈されるという関係性が、実に興味深い。さらに、火中に身を投じるブリュンヒルデの殉死には（『ヴォルスンガ・サガ』に由来）、「権力に対する愛の勝利」、すなわち、古い神々の「権力」世界の終焉と、新しい人間の「愛」の世界の到来が暗示されているという。このように、『ニーベルンゲン之歌』で脱神話化したブリュンヒルトは、『ニーベルングの指環』ではほかならぬ再神話を果たし、さらに己の意思で人間と化し、未来の「愛」の世界を築き得る「永遠に女性的なるもの」として、「救い」の象徴へと転じ得る。この超越者的存在へと向かうブリュンヒルトの、否、ブリュンヒルト神話の弁証法的発展性の発見こそ、本書の最大の魅力なのである。

* * *

第一章から第六章までがブリュンヒルデの壮大な「変容」の軌跡とするならば、第七章「現代におけるニーベルンゲン伝承作品」では、ワーグナー受容を中心とした20-21世紀の諸作品が、自由な筆致で紹介されていく。ザムエル・ループリンスキーの『グンターとブリュンヒルト』（1908年）しかり、パウル・エルンストの戯曲『ブルンヒルト』（1909年）しかり、マックス・メル戯曲『ニーベルンゲン族の災い』（1942／51年）しかり。とはいえ着目すべきはやはり、第一次世界大戦敗北後、自国民の根源たるゲルマン神話回帰を呼び起こした、フリッツ・ラング監督の無声映画『ニーベルンゲン』二部作（1924年）であろう。それから、ヘルマン・ヘンドリッヒやアーサー・ラッカムの絵画（挿絵）が美しい図版と共に紹介され、ウーリー・エデル監督の映画『ニーベルンゲンの指環』（2004年）、宇神幸男の小説『ニーベルングの城』（1992年）、里中満智子、あずみ棕、池田理代子・

宮本えりか、松本零士と人気漫画家のニーベルンゲン作品が名を連ねる。しめくくりにはやはり、宮崎駿『崖の上のポニョ』（2008年）が挙がっている。人間界に入った魚の子ポニョが海に連れ戻され叱られる時に、父親が「ブリュンヒルデ」と叫ぶ箇所も忘れられず指摘されている点に、石川氏の視野の広さを痛感した。危険にさらされた人間界を救うべく、魚から人間に生まれ変わるポニョという人物造形が、ジークフリートの愛を受け入れ人間となり、最終的に世界を変えるワーグナー楽劇のブリュンヒルデ像の影響を受けているとしたら、そこには、のびやかなる考察空間が果てしなく広がっているのではなかろうか。

ところで、（研究者ではなく一女性読者として本書に対峙するならば）、ブリュンヒルトの周辺には、姦計や男性の裏切り、さらに女性同士のマウント等が集積しており、いささかハードボイルドとも言える。ならば、戦場を駆け抜け、死した英雄をワルハラへと運ぶ主体的役割を剥奪され、他者（男性）によって価値を定められる、いわば受動的立場へと転じゆくこのモチーフの歴史社会的再考察等も、興味深いのではなかろうか。とはいえ、そのいささかハードな内容を最後まで冷静に読めるのは、著者の上品で丁寧かつ客観的なことば選びと、予兆や前触れ（俗にいうフラグ）を含む心憎い章構成および演出の賜物である。このように、文学文化研究のみならず、社会文化研究への問題提起をも予感させる本書は、北欧ゲルマン神話研究の入門書としても、あるいはドイツ語圏文化研究関連授業のテキストにも最適な、大いなる啓発の書と言い得よう。

注

- 1) Grimm, Wilhelm: Über die Entstehung der Altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der Nordischen (1808). In: Gustav Hinrichs (Hg.): *Kleinere Schriften von Wilhelm Grimm I.* Berlin 1881, S. 102.

（教育評論社、2024年）